

くまもとをフットワークでネットワーク。

みどりの周波数
RKK
熊本放送

熊本市山崎町30 TEL 328-5511(受付案内)

自分を中心情報 正しく伝え、演奏者とのコミュニケーションの中から、
すばらしいハイモードを生み出します。
放送局の偉観は、やはりフットワーク。
くまとの身近な情報、知りたい話題を
正確にスピーディにラツトワークでネットワーク。
RKKは、電波のコンダクターとして、さらにコミュニケーションを広げます。

ベートーヴェン
第九
第8回

平成元年12月24日(日)午後6時30分
熊本県立劇場コンサートホール
主催:熊本県・(財)熊本県立劇場・県民第九の会・熊本県文化協会



熊本県知事
細川護熙



熊本県立劇場館長
鈴木健二



熊本県文化協会会長
岩下雄二



県民第九の会実行委員長
有馬俊一

毎年、暮になりますと日本全国で「第九」の競演が繰りひろげられておりますが、熊本で県民第九の会による演奏会が開かれるようになって、今年で8年目となりました。

ベートーヴェンがシラーと共に全世界の人々に呼び掛ける永遠の歓喜の歌、この不朽の名作の演奏が県民の手で実現され、回を重ねる毎に確かな、大きな力となり、蓄えられていくことに、深い感動を覚えます。

県下各地からお集まりの熱意に満ちたメンバーの皆さんと、熊本交響楽団とが歌い奏でる「第九」は、年の瀬の慌ただしさの中での後悔や焦躁といったものを消し去り、私たちに、新しい年への希望を想起させてくれます。

出演者だけでなく、聴衆の皆さんも、開演を心待ちにしておられることと思います。

本日も、力強い歓喜の歌がこの県立劇場のホールに響きわたり、素晴らしい演奏会となりますことを祈念して、ごあいさついたします。

ベートーヴェンの最後の交響曲「第九」はすっかり師走の日本の風土に溶け込んで、各地で「歓喜の歌」が唱われます。音楽は時間の芸術でドイツ人の得意とするところですが日本人の時間の芸術は祭りにも発揮されます。大晦日から正月までの時の移行を神聖視し、しみじみと味わうのは、日本人特有の感覚でしょう。そこには古いものから新しいものへ、暗いものから輝かしいものへの希求がみられます。それはシラーの「苦悩をへて歓喜へ」と共鳴しあっています。

第九の中には、ベートーヴェンの生涯の理念が結晶している思いがあります。年の瀬に第九を歌うのは日本人だけの、しかも最近の習慣ですが、私達は年に一回、確実に人類の幸福に出会いを感じがし、そしてこの出会いの中で私達は自らの心の奥底にある「祈り」を発見することができるのです。それが、人間の根源であり、第九を通して、人類の天才ベートーヴェンが私達に微笑んで語りかけてくれる気がするのです。

今夜、あなたは、音乐会の終ったあとで県立劇場のライトアップした樹々をだれかと一緒に見るのはずです。ベートーヴェンでしょうか。いいえ、それはあなたにとっての人類なのです。

多事多端であった平成元年も年末となり、また第九の季節を迎えた。この時季になると第九を聴きたいと願う人が年々増えているようで、全国では200回を超える演奏会が開催されるそうである。熊本に於ても県文化協会と県民第九の会の協力で、県民の皆さんに第九を聴いて頂くことが出来るのは大きな歓びである。先般玉名市を中心として第2回県民文化祭が行われ、県下の文化諸団体の協力で多大の成果を挙げたのであるが、之はこうした文化行事の本年最後を飾るものである。

聞くところによると、全国各地で行われる第九演奏会の多くは、プロのオーケストラの出演で行われるそうであるが、我が熊本はオーケストラも合唱団もアマチュアであり熊本県民である。アマチュアがその力を結集してベートーヴェンの傑作に挑戦し、それを県民への年末の贈物とする。まさに素晴らしいことであり、それはまた熊本の文化水準の高さを示すものもあると思う。技術的には未熟な点もあるのだろうが、熱意と努力によって聴く人の胸にせまる演奏にして欲しいものである。

この演奏会の開催に尽力して下さった県立劇場と県民第九の会に感謝しご成功を祈る次第である。

本日はご来聴下さいまして有難うございます。おかげ様で第九演奏会は第八回を迎えます。県民の皆様方のご支持で年々聴衆が増え、今年も盛大に開催出来ますことを感謝申し上げます。

昨年、一昨年は安永武一郎氏の指揮で幸いに好評を頂きましたが、今年は小松一彦氏にお願い致しました。先般行われた熊響の定期演奏会が、同氏の卓越した指揮で近來の名演奏と高い評価を受けたことはご存じのことと思いますが、その小松氏のご指導で、どのような第九を皆様にお聴かせ出来るか、私達は期待と不安で一杯です。問題はアマチュアの集まりである私達が、氏の指揮に対応出来るかどうかと言うことですが、熱意と努力で氏の指導に応え、熊本の県民第九の会は鍛え甲斐があるとお認め頂きたいものと思っております。

今年の合唱団員公募には、県下各地より400名を超える応募がありました。8回連続という人が20名以上ある一方で、第九を歌うのは初めての人も100名程あります。高校生から70才以上の人まで、年令も職業も音楽経験もさまざまです。それ等の人達が九月以来練習を重ねて参りました。力を合わせ心を一つにして懸命に演奏します。未熟な点はご寛容下さいまして、年の瀬のと時を第九の調べと共にお過し下さい。

指揮 小松一彦

独唱 ソプラノ 秋山恵美子
メゾソラノ 木村宏子
テノール 成田勝美
バス 高橋啓三

合唱 県民第九の会合唱団

合唱指揮・岩代和武
ピアノ・杉野恵美

管弦楽 熊本交響楽団



昭和63年12月25日〈県民第九の会演奏会（指揮＝安永武一郎）〉から



指揮 小松一彦

1972年桐朋学園大学指揮科卒業。故斎藤秀雄氏に師事。NHK交響楽団指揮研究員、西独ライン・ドイツ歌劇場副指揮者を経て1982年大阪の新しいオーケストラ、関西フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者に就任した実力派で、短期間に関西フィルの演奏能力を飛躍的に向上させた手腕は高く評価され、1984年度大阪府民劇場奨励賞を受賞。1988年1月より関西フィル名誉指揮者に推挙される。

1978年NHK交響楽団を指揮して「幻想交響曲」その他で正式デビュー。以来全国各地のオーケストラと共に演を重ねる。オペラや現代曲の初演にも定評があり、1976年東京室内歌劇場「アルジェのイタリア女」でオペラデビューを飾ったのをきっかけに、各歌劇団で30本以上のオペラを手掛け、オペラ指揮者としての地位も確立。また、N響を指揮した音楽ファンタジー「もがり笛」でイタリア放送協会賞を受賞。近年は海外での評価も高く、1986年9月には中国より招かれ、北京の国立中国放送交響楽団を指揮、大成功を収め、昨年より同交響楽団の常任客員指揮者に就任。外国人が中国のオーケストラの正式ポストに就くのは初めてのこと、文化大使として大きな役割と成果が各方面から期待されている。

さらに、NHKテレビ「名曲アルバム」の指揮者として茶の間にも幅広い人気をもっており、その活動が現在最も注目されている国際的な指揮者の一人である。1988年4月より札幌交響楽団専属指揮者を兼任。

現在、札幌交響楽団専属指揮者、関西フィルハーモニー管弦楽団名誉指揮者、国立中国放送交響楽団常任客員指揮者（北京）

秋山恵美子(あきやま・えみこ)
ソプラノ



国立音楽大学卒業。同大学院修了。伊田栄子、西内静、ゲルハルト・ヒッシュに師事。

第19回文化放送音楽賞受賞。第42回音楽コンクール第2位入賞。

「夕鶴」では、作曲者(團 伊玖磨)自らの指揮のもとにつうを歌い、代表的な持ち役になっている。その他「黒船」のお吉等邦人作品をはじめとし、「椿姫」のヴィオレッタ、「魔笛」のバミーナ、等数多くのオペラに出演している。「ファルスタッフ」のアリーチェ、又、「薬剤師」のヴォルピーノの時には、E.ヘフリガー氏と共に演じている。オペレッタの才能も豊かで、「こうもり」のアデーレとロザリンデ、「メリーウィドウ」のハンナとヴァランシェンヌ等に出演している。

ミュージカルにも進出し、「学生王子」の王女マルガレーテ、博品館劇場では「シェルプールの雨傘」のエムリ夫人、「サウンド・オブ・ミュージック」ではマリア、「マイ・フェア・レディ」ではイライザと各々歌い分ける現代的感性も持ちあわせている。

その他、ヴェルディ、モーツアルト、フォーレの「レクイエム」、ベートーヴェン「ミサ・ソレムニス」「交響曲第九番」、ヘンデル「メサイヤ」等コンサートでも活躍するなど、驚くほどの多様な仕事ぶりである。又、毎日新聞社主催の「毎日ソリストン」でドイツ歌曲中心のリサイタルを開き好評を博した。

二期会会員

木村宏子(きむら・ひろこ)
メゾ・ソプラノ



東京芸術大学卒業。関 種子、佐々木成子に師事。1957年文化放送音楽賞受賞。

1959年「フィガロの結婚」のケルピーノでオペラにデビュー。美しい声と広い声域、豊かな音楽性と表現力をもち、その後「椿姫」のフローラ、「ロング・クリスマス・ディナー」(ヒンデミット)のジュネビエーブ、「ラインの黄金」のフロースヒルデ及びウォークリンデ、「蝶々夫人」のスズキなどを歌っている。

他方コンサートの分野でも我が国第一級のメゾ・ソプラノ歌手として高い評価を得ており、1959年から5年間N響のベートーヴェンの「交響曲第9番」のソリストとして連続して出演したのをはじめ、主要交響楽団との協演により、「レクイエム」(モーツアルト・ヴェルディ)、「メサイア」(ヘンデル)、「クリスマス・オラトリオ」(バッハ)、「変ホ長調ミサ」(シューベルト)他、多くの曲を演奏しており、この分野においても不可欠の存在となっている。

また、「74年の「毎日ソリストン」と'78年6月に行なったリサイタルでは、ドイツ歌曲の神髄に迫り絶賛をあびている。1982年には「ディドとエネアス」の名演唱によってウィンナ・ワールド・オペラ賞を受賞。昭和60年度 芸術祭賞受賞

二期会会員

成田勝美(なりた・かつみ)
テノール



国立音楽大学声楽科首席卒業。渡邊高之助、布施隆治、栗林義信の各氏に師事。武岡賞受賞。卒業演奏会受賞。皇居内 桃華楽堂に於いて御前演奏会出演。読売新聞社主催新人演奏会に出演、オットマール・スヴィトナー指揮NHK交響楽団公演オペラ「アチスとガラテア」にアチスで出演。1983年度文化庁芸術家国内研修員になる。二期会オペラスタジオ在学中に第14回日伊コンクール第1位入賞、あわせてミラノ大賞受賞。

1984年、二期会オペラスタジオ卒業、優秀賞受賞。同年イタリアへ渡り、ミラノのヴェルディ音楽院に入学。エミリア・クワドリ女史に師事。1986年、スカラ座の外国人才オーディションに合格。発声をニーノ・スカットリーニ氏、音楽をジャチント・プランデリ氏、故エットーレ・ペッシーナ氏に師事。1987年「カルメン」のドン・ホセで、二期会オペラ・デビューを果し、身長187センチのめぐまれた容姿にリリコ・スピントの美声で、好評を博した。これまでに「愛の妙薬」のネモリーノ、「ジャンニ・スキッキ」のリヌッチオ、「ルチア」のエドガルト、「椿姫」のアルフレードを手がけている。その他、ヴェルディ「レクイエム」、ベートーヴェン「第九」等でコンサートでも活躍している。

二期会会員

高橋啓三(たかはし・けいぞう)
バス



東京芸術大学卒業。磯谷 威、大熊文子、中山悌一、渡邊高之助各氏に師事。芸大在学中に「トスカ」のアンジェロッティでデビュー。その後二期会を中心に藤原歌劇団、イタリア歌劇団(NHK)、日本オペラ、オペラプロデュース等の公演に出演。美声のバス・カンターピレとしてオペラに欠くことのできない存在である。主な役に「フィガロの結婚」のフィガロ、「魔笛」のザラストロ、「リゴレット」のスパラフチレ、「愛の妙薬」のドゥルカマーラ、「タンホイザー」のヘルマン、「夕鶴」の惣ど、「修善寺物語」の夜叉王等があり、スケールの大きい歌唱力と演技で絶賛されている。またコンサートの分野でも「第九」「レクイエム」「メサイヤ」「マタイ受難曲」「口短調ミサ」「森の歌」など幅広いレパートリーを持ち、N響の定期演奏会をはじめ、主要オーケストラと協演し、オラトリオ歌手としての地位を築いている。第44回音楽コンクール第2位。第10回、ならびに1989年度第17回ジロー・オペラ賞を受賞。東京音大助教授、東京芸大講師。

二期会会員

1. 「プロメテウスの創造物」序曲作品43 ベートーヴェン

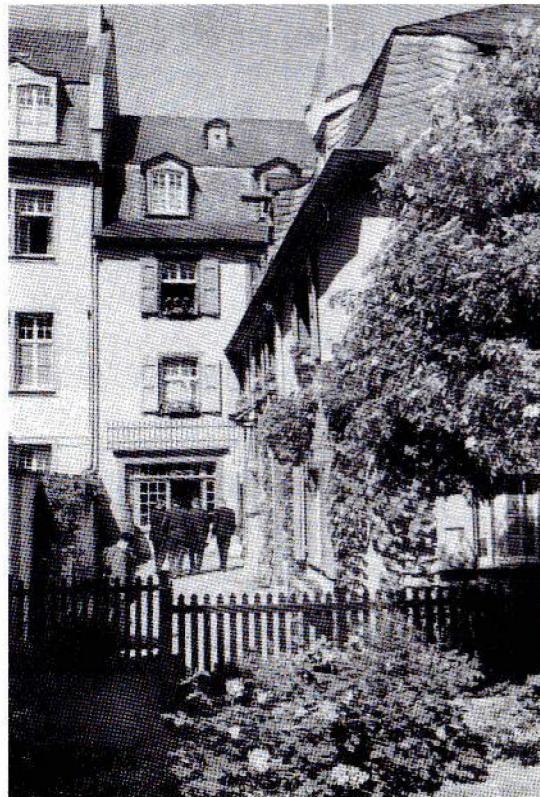
2. 交響曲第9番二短調「合唱付き」作品125 ベートーヴェン

第1楽章 Allegro ma non troppo, un poco
maestoso

第2楽章 Molto vivace

第3楽章 Adagio molto e cantabile

第4楽章 Finale



ベートーヴェンの生家（ボン）

ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツのボンで生まれた。1970年にはベートーヴェンの生誕200年を記念した様々な催しが全世界で行われた。

ポンで行われた“第九”の演奏会には日本からもある大学の合唱団が参加した。その演奏会の模様がラジオで中継されると、ポン中の人々は自分の家のラジオのボリュームを一ぱいに上げて、窓辺に外へ向ってそのラジオを置いたという。

ポン中にベートーヴェンの“第九”が鳴り響く様子を思い浮かべると、実に壯観で感動的であつたに違いない。同時に、ポンの人々のベートーヴェンを誇りに思う気持と愛する気持が手にとるようにわかる。



ライン河の埠場から眺める対岸のボン市全景 1800年頃

■シラー=《歓喜に寄す》

対訳=大宮真琴

O Freunde, nicht diese Töne! sondern
lässt uns angenehmere anstimmen, und
freudenvollere.

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium.
Wir betreten feuer-trunken,
Himmelsche, dein Heiligtum!
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt,

Wem der grosse Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja, Wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend sich aus diesem Bund!

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

Seid umschlungen Millionen!
Diesen Kuss der ganzen Welt!
Brüder über'm Sternenzelt
Muss ein lieber Vater wohnen.
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn über'm Sternenzelt!
Über Sternen muss er wohnen.

バリトン独唱

おお、友よ、この調べではなく、
さらに快い、さらに遊びに満ちた調べを
ともに歌おう！

バリトン独唱・合唱

- ①遊びよ、神々のうるわしい輝きよ！
樂園の娘らよ！
われらみな、感動に酔い、
天の高みの神殿に踏み入ろう！
- ②この世に厳しく引き離された者らを、
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。
御身の優しい翼の憩うところ、
すべての者らは、同朋（はらから）となる。

四重唱・合唱

- ③大いなる天の賜物をうけた者らよ、
真空の友情をかち得た者らよ、
女の優しい愛を得た者らよ、
遊びの歌を、ともに歌え！
- ④しかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも
地上の友と呼べる者を持つことができるならば！
だが、それさえ持つことのできなかった者は、
涙しつつ、足音をしのばせ、立ち去るがよい！

四重唱・合唱

- ⑤すべてこの世に在るものら、
自然の胸から遊びを飲み、
すべての善人も、すべての悪人も、
遊びの薔薇の小径を行く。
- ⑥遊びは、われらに、口づけと葡萄酒と、
そして、死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、
天使ケルピムは、神の御前に立つ。

テノール独唱・男声合唱

- ⑦遊びよ、遊びよ、神の太陽たちが、
壮大な天の軌道をたのしく飛びかうように、
- ⑧同朋（はらから）よ、おのれの道をすすめ、
遊びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

合唱

- ⑨たがいに手をとり合おう、億万の人々よ！
この口づけを、全世界にあたえよう！
同朋（はらから）よ、星のかなたには、
愛する一人の御父が住み給うのだ。
- ⑩ひれ伏して祈るか？ 億万の人々よ。
創り主を心に感ずるか？ 世界の民よ。
星空のかなたに、主をさがし求めよう！
星たちのうえに、主は住み給うのだ！

1. 「プロメウスの創造物」序曲作品43 ベートーヴェン

ベートーヴェンは、バレエ音楽を生涯に2曲だけ書いているが、この「プロメテウスの創造物」はその二番目のものである。これは1801年3月28日に、ウィーンの宫廷劇場で初演された。ベートーヴェンはその頃、聴覚の異常がいちじるしくなってきていたが、作曲家としては、めきめきと頭角をあらわしていた。その名声を耳にした当時一流の舞踊家カルヴァトーレ・ヴィガーノが、このバレエのために音楽を注文したのである。

ヴィガーノのプロメテウスは正確な記録は失われているが、大体次のようなものであったろう、といわれている。

「プロメテウスは、陶土と水で美しい人形を二体作り、神々の住むオリンポスの山で、これに魂を吹き込んで人間にするために、まず太陽から火をつかんで生命を吹き込む。つぎに、これに芸術を与えるために、パルナス山へ行き、悲劇の女神メルポメーネ、喜劇の女神ターリア、舞踊と合唱の女神テルプシコニーに教えを受け、最後に酒神バッカスから酒の功德を聞き、ついに二つの人形は完全な人間（創造物）となる。」

このバレエ音楽は序曲、導入部および16曲の音楽からなる。

序曲は、全体が展開部のないソナタ形式をとっている。まず、16小節からなるアダージョの序奏は、ベートーヴェンが、その頃発表した第一交響曲の開始と同じように、主和音ではなく、属七の和音の強奏によって始まる。オーボエとホルンとが静穏な主題を歌いはじめる。序奏につづく主部はアレグロ・モルト・コンプリオで、第一ヴァイオリンによって、まるで無窮動曲のように走りまわる連続した八分音符の主要主題が奏され、楽器を重ねながら次第にffに達する。副主題はフルートによって歌われるもので、その間を縫うようにオーボエが埋めて行く。そのあと両ヴァイオリンによって付点のついた新しい主題が奏される。

なお、このバレエ音楽の第16曲「フィナーレ」の主題は、同じベートーヴェンによって、作品35の「エロイカ変奏曲」や第三交響曲「英雄」作品55の終楽章のテーマとしても使用されており、よく印象深いものである。

2. 交響曲第9番 二短調「合唱付き」作品125 ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に、九番目の交響曲に着手した。

1793年に、ポンのフィッシェニヒは、シラー夫人に手紙で「彼は歓喜をも、しかも各筋残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ポンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんたり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いっきょに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいだいて、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大なる精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルントナートア劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、くい違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終ったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びせた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

〔第一楽章〕 Allegro ma non troppo, un poco maestoso

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの樂章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度（第三音がない）の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモティーフが圧縮され、第1主題が澎湃（ほうはい）として湧きおこる巨大な塊のごとく聳然（しょうぜん）たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかって、このような主題の出現を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異って、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気分をもち、ときどき第1主題の部分をまじえながら展開部へとつなぐ。そしてその劇的壮大さは再現部における第1主題への壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワーグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びをかち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一樂章の基礎をなしているように思える」である。

〔第二楽章〕 Molto vivace

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ樂想が、およそ考えうる限りのすべての展開を行なう。トリオの主題はあきらかに第一樂章のエピソードから受けつけられたものであり、終樂章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果すことにもなるのである。

ワーグナーは「激しい喜びが、この第二樂章のはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々は入り、そこで陶酔や麻醉へと駆りたてられるからである……」と言っている。

〔第三楽章〕 Adagio molto e cantabile 讃美歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴するよ

うな明るく美しい第二主題、この両主題にもとづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中での一つの頂点であり、ワーグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱（ゆううつ）な感覚へと溶けさせて行くことか、思い出がつとに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのように思われる…」といっている。

〔第四楽章〕 Finale

第1呈示部=まず管楽器によるあわただしい樂想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの樂章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの歡びらしい旋律が現われる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返しながら全合奏に至る。

第2呈示部=この樂章の初めの、あわただしい樂想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめる。そして男声合唱が、力強く歌いくわわる。

再現部=やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組合わされて、壯麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中の一つのクライマックスを形づくる。

コーダ=曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかぎりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストソとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

「県民第九の会」実行委員会

(50音順)

有馬俊一 (実行委員長)	神田一伸	田北洋康	藤枝昭俊
岩代和武	草刈秀克	黒葛原潔	本山洋
江橋克己	下田宰城	林原隆治	山崎崇伸

「県民第九の会」合唱団
インスペクター 藤枝 昭俊 CHORUS

新十郎 行文旭夫 也文夫也一夫雄寿也郎雄磨修宣肇
新秀興 有愛降 哲和昭賢喜和新逸津琢勝
本 田 野 山 井 掛 子 江 川 砂 嶋 村 元 本 園 原 山
橋 林 林 東 日 福 富 藤 二 古 前 真 松 松 松 松 味 宮 村 笠

行輔克三生郎吉浩次典亨示幸彦章治年健嗣淳成也

直大秀哲隆祐信 正英盛啓竹裕泰辰和 利一勝

原藤刈藤保嶋藤村季田垣谷藤山原園山井村本野

清清草工久小近坂四嶋新酢須竹田椿中中西西萩

史幸幸広隆幸男夫靖久俊一己郎右樹男美裕博伸雄

貴恒和正俊浩宜善弘智貴純克敬恵秀喜清康和一幸

塚塚星田江原甲上家田宮藤橋津川斐斐目口田村

赤赤阿有市一井氏内宇衛江大小岡甲甲勝川神北

島方田本 尾岡岡下島川原井上永田田原田 Bass バス 正柳

義夫喜一一眞典治衛彦秀淳司夫史二郎彦史 晴

勝邦昌健賢 孝文 義清 良利博弘眞道祐

柿原杉田野村 田山野田田塚田梨藤林波道尻葉 青

東荷野橋闇松松松宮宮村村松山山吉六

洋行幸駿雄二昂浩郎広一毅夫一郎夫豊八明裕秋展

孝祐 昭栄 健勝健 基賢二久 洋弘雅昌浩

島方田本 尾岡岡下島川原井上永田田原田 Bass バス 正柳

義夫喜一一眞典治衛彦秀淳司夫史二郎彦史 晴

勝邦昌健賢 孝文 義清 良利博弘眞道祐

柿原杉田野村 田山野田田塚田梨藤林波道尻葉 青

東荷野橋闇松松松宮宮村村松山山吉六

洋行幸駿雄二昂浩郎広一毅夫一郎夫豊八明裕秋展

孝祐 昭栄 健勝健 基賢二久 洋弘雅昌浩

島方田本 尾岡岡下島川原井上永田田原田 Bass バス 正柳

義夫喜一一眞典治衛彦秀淳司夫史二郎彦史 晴

勝邦昌健賢 孝文 義清 良利博弘眞道祐

柿原杉田野村 田山野田田塚田梨藤林波道尻葉 青

東荷野橋闇松松松宮宮村村松山山吉六

洋行幸駿雄二昂浩郎広一毅夫一郎夫豊八明裕秋展

孝祐 昭栄 健勝健 基賢二久 洋弘雅昌浩

島方田本 尾岡岡下島川原井上永田田原田 Bass バス 正柳

義夫喜一一眞典治衛彦秀淳司夫史二郎彦史 晴

勝邦昌健賢 孝文 義清 良利博弘眞道祐

柿原杉田野村 田山野田田塚田梨藤林波道尻葉 青

東荷野橋闇松松松宮宮村村松山山吉六

洋行幸駿雄二昂浩郎広一毅夫一郎夫豊八明裕秋展

孝祐 昭栄 健勝健 基賢二久 洋弘雅昌浩

島方田本 尾岡岡下島川原井上永田田原田 Bass バス 正柳

義夫喜一一眞典治衛彦秀淳司夫史二郎彦史 晴

勝邦昌健賢 孝文 義清 良利博弘眞道祐

柿原杉田野村 田山野田田塚田梨藤林波道尻葉 青

東荷野橋闇松松松宮宮村村松山山吉六

洋行幸駿雄二昂浩郎広一毅夫一郎夫豊八明裕秋展

孝祐 昭栄 健勝健 基賢二久 洋弘雅昌浩

島方田本 尾岡岡下島川原井上永田田原田 Bass バス 正柳

義夫喜一一眞典治衛彦秀淳司夫史二郎彦史 晴

勝邦昌健賢 孝文 義清 良利博弘眞道祐

柿原杉田野村 田山野田田塚田梨藤林波道尻葉 青

東荷野橋闇松松松宮宮村村松山山吉六

洋行幸駿雄二昂浩郎広一毅夫一郎夫豊八明裕秋展

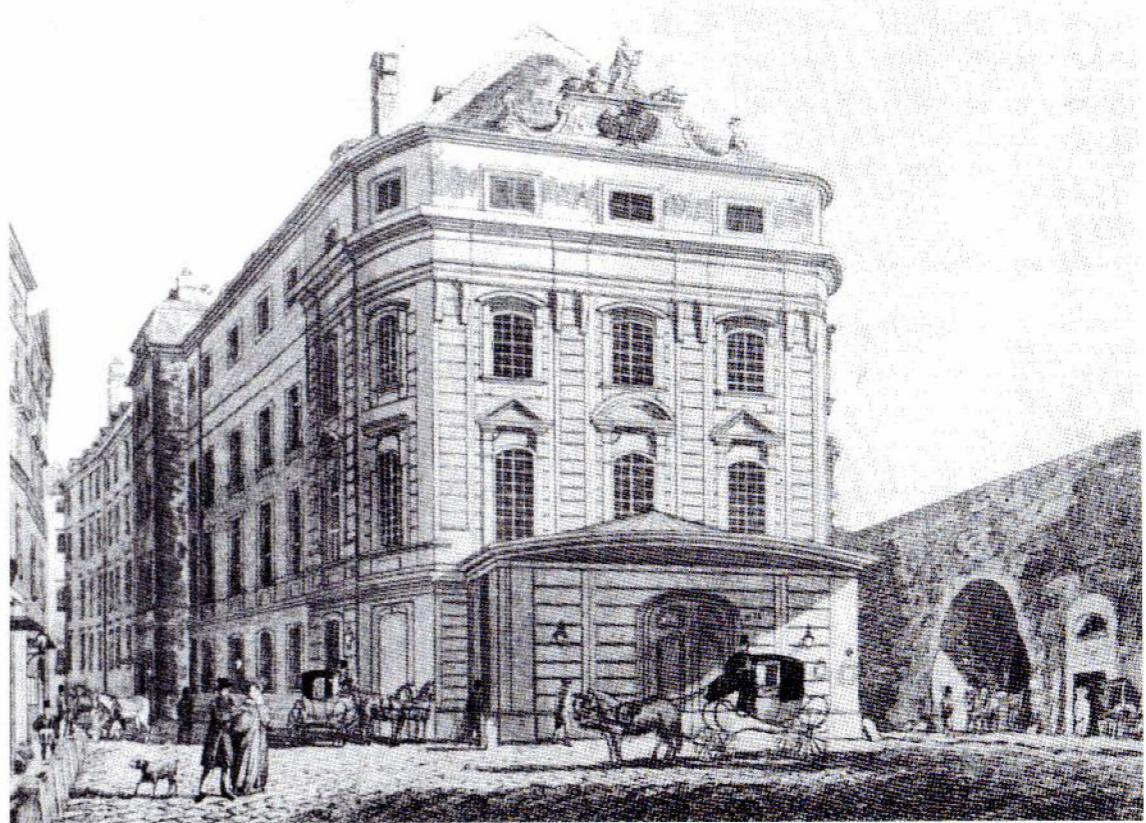
孝祐 昭栄 健勝健 基賢二久 洋弘雅昌浩

島方田本 尾岡岡下島川原井上永田田原田 Bass バス 正柳

義夫喜一一眞典治衛彦秀淳司夫史二郎彦史 晴

勝邦昌健賢 孝文 義清 良利博弘眞道祐

柿原杉田野村 田山野田田塚田梨藤林波道尻葉 青



「第九」の初演が行われたケルントナートア劇場

熊本交響楽団
KUMAMOTO SYMPHONY ORCHESTRA

(コンサートミストレス)	松崎 浩二	〈コントラバス〉	〈ホルン〉
鶴 和 美	松村 美紀	伊津野 恵	猪野 敬一郎
	本山 洋	古泉 俊彦	斎藤 恵之
1stヴァイオリン	吉永 裕子	国米 稔	高橋 毅
東 恭子		後藤 誠司	田畠 博行
井上 あかね	〈ヴィオラ〉	重田 まゆみ	黒葛原 潔
桂 敦子	上田 恭子	田上 博子	安松 真司
木崎 珠美	大河内 直子	竹内 尚志	
木村 宦子	緒方 肇	歳田 和彦	〈トランペット〉
古泉 晃子	清元 晃	原國智枝	市原 彰
坂田 弘子	甲田 啓子	平川 和秀	豊田 恭司
田中 知子	杉原 由江		堀江 幸司
田野 育美	田中 直子	〈フルート〉	
黒葛原 契子	藤米田 重典	〈ピッコロ〉	〈トロンボーン〉
鶴 和 美	野尻 晃一	緒方 宏明	書川 欣也
長坂 浩子	開田 恒代	隈 紀子	鍋島 靖夫
東 眞知子	毎床 一寿	山口 邦子	早川 真二
松本 芳昭	眞野 恵司		〈オーボエ〉
山崎 貴子	水田 剛		金坂 義徳
山崎 崇伸	吉田 教子		白尾 友宏
柚原 三弥子	吉田 美智子	片岡 久哉	三原 浩古
2ndヴァイオリン		〈チェロ〉	
上田 萬二	石垣 博志		
大江 紀子	片山 玲子	〈クラリネット〉	
岡純子	高浜 秀光	高野 栄次	
清永 健介	高木 成子	田中 尚昭	
草野 正夫		田中 久美子	
古閑 文子	津田 一彦	保田 明子	〈ファゴット〉
小柳 敦子	梶田 博文		黒田 孔太郎
佐藤 弘美	長尾 和治		高木 群之
高木 信夫	長坂 輝喜		蓮沼 昇
田中 裕子	深松 真也		山中 朗史
谷川 くみ子	本田 義信		
田上 るみ子	三浦 純子		
平井 隆博			

県民第九の会演奏会記録

*は同時演奏曲

第1回 昭和57年12月28日(火)

指揮 山田 一雄
独唱 新圭子 木村 宏子 伊津野 修 高橋 修一
※越天 楽(雅楽) 近衛 秀磨(編曲)

第2回 昭和58年12月11日(日)

指揮 大友 直人
独唱 高見久美子 岡 ますみ 大野 光彦 柴田 啓介
※歌劇「ニュルンベルグのマイスター」前奏曲 ワーグナー

第3回 昭和59年12月27日(木)

指揮 山岡 重信
独唱 中沢 桂 木村 宏子 板橋 勝 池田 直樹
※弦楽のためのアダージョ 作品11 バーバー

第4回 昭和60年12月25日(水)

指揮 フランティシェック・ワイナール
独唱 三繩みどり 妻鳥 純子 伊達 英二 中村 邦男
※レオノーレ序曲第3番 作品72 ベートーヴェン

第5回 昭和61年12月27日(火)

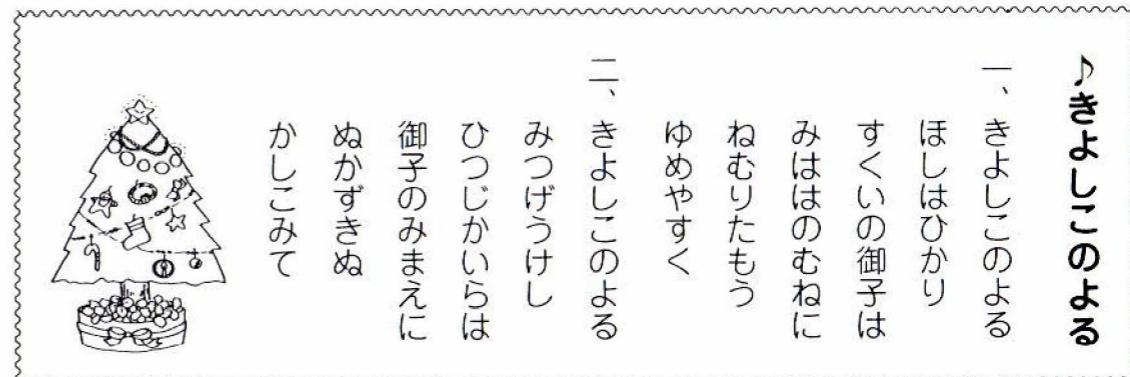
指揮 荒谷 俊治
独唱 津下美奈子 木村 宏子 鈴木 寛一 芳野 靖夫
※トッカータとフーガ 二短調 バッハ～ストコフスキ

第6回 昭和62年12月26日(土)

指揮 安永武一郎
独唱 中沢 桂 木村 宏子 近藤 伸政 栗林 義信
※エグモント序曲 作品84 ベートーヴェン

第7回 昭和63年12月25日(日)

指揮 安永武一郎
独唱 三繩みどり 木村 宏子 鈴木 寛一 平野 忠彦
※序曲「コリオラン」ハ短調 作品62 ベートーヴェン



ベートーヴェン 第九

曲目

ベートーヴェン
プロメテウスの創造物作品.43
ベートーヴェン
交響曲第九番二短調作品.125
合唱付き

指揮 小松一彦
ソプラノ 秋山恵美子
メゾ・ソプラノ 木村 宏子
テノール 成田 勝美
バリトン 高橋 啓三
合唱:県民第九の会合唱団
管弦楽:熊本交響楽団

12/24(日)午後6時30分開演
熊本県立劇場コンサートホール

■主催／熊本県・財熊本県立劇場・県民第九の会・熊本県文化協会

■入場料／S(指定席)3,000円・A(指定席1・2階)2,500円・B(自由席3階)1,500円

■入場券は、11月26日より県立劇場および市内各プレイガイドにて発売します。(KNサービス・熊本交通センター・大谷楽器・西野楽器・熊本県立劇場)

■お問い合わせ先／熊本県立劇場企画事業課 ☎096(363)2233・県民第九の会事務局 ☎096(344)2941

*お子様でも一人一枚の入場券が必要です。なお未就学児童の方の同伴・入場はお断り致します。

*会場内の喫煙・飲食・静音・録画等は強くお断り致します。

*終演後、臨時路線バス(交通センター行・熊本駅行)を運行いたしますのでご利用下さい。